

581 Architects in the World 世界の建築家581人

581 ARCHITECTS

企画・編集—ギャラリー・間
監修—三宅理一・村松伸・淵上正幸

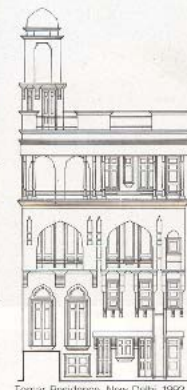
Revathi Kamath & Vasant Kamath

レヴァシ・カマス&ヴァサント・カマス



Vasant Kamath (左) 1946年インド、オリッサ生まれ。70年ロンドン大学大学院修士課程修了。71年ロンドンの設計事務所にて1年間勤務の後インドに戻る。81年妻のレヴァシと共に設計事務所を設立。ニューデリー大学都市計画・建築学部で教鞭を執る。

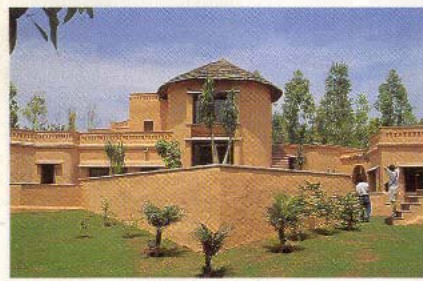
Revathi Kamath (右) 1955年インド、カルナタカ生まれ。81年デリー大学都市計画・建築学部大学院修士課程修了。81年夫のヴァサントと共に設計事務所を設立。ニューデリー大学都市計画・建築学部で教鞭を執る。



Tomar Residence, New Delhi, 1992



Tomar Residence, New Delhi, 1992. P. V. Kamath



Judge Residence, New Delhi, 1990. P. V. Kamath



Judge Residence, New Delhi, 1990. P. S. Kumar

レヴァシ&ヴァサント・カマスにとって、建築は、自立した現象ではなく、地域の伝統や慣習や儀式、そして場所づくりという神聖な芸術の統合されたものである。伝統や芸術的で人間的な価値に対する敬意は、自由奔放な商業主義の現実と復活する工業主義によって妨げられる現実と均衡と調和を与え、持続すべき建築を造ります。彼らは、職人との協働が、物づくりに参加する行為だと見なしており、その結果は単なる装飾ではなく純粋に独創的な表現となる。職人たちが建築家が「視覚化した枠組みの中で自分の創造性を追求している。『判事の泥の家』では、彼らが、緩やかな勾配の敷地の上に壁の位置やさまざまな部屋の床の高さを指定したプランを用意したが、断面や立面のデザイン、扉や窓のデザインやそれらの位置の選定は、職人たちによって展開された。アーチであれ持ち送りであれ、開口部のデザインの決定は、目の前にあるものを参照して、現場で協働で行われる。最終的に『構築された事実』は、大きな家そのものへの関心とともに小さなニッチのディテールへの関心を反映している。彼らは、泥を代替テクノロジーとしてではなく、現代の素材として現実的・創造的に用いている。彼らにとって、泥は美しく力強く一体化できる、持続性のある素材である。泥の建物は生命を存続させる、大地への詩的な回帰であ

り実存の源泉である。住宅という小さなスケールの中で彼らは、職人の熟達した技術を統合する構築の伝統の真の再生をめざしている。デリーにある石造りの『カマル・シン邸』と『ナリシ邸』でも、伝統的な形態・素材、そして職人たちの参加に醸成されたさまざまな配慮が反映されている。このように、地域に固有な伝統に着想を得たとはいえ、彼らの作品には生来の近代性がある。それは現代の粉砕された現実の中で、さまざまな価値や内容に回帰し、崩壊した時間の連続性に横渡りをしているように思われる。